
秋風の吹くころに

一番星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋風の吹くころに

【Nコード】

N1645Q

【作者名】

一番星

【あらすじ】

たまたまぶつかった人が爽やか系のイケメン。学校も同じだったというのでかなりの運命的！可愛い恋のお話です。

いろいろぶつかったりもするけどこのあとの展開が気になります！？

出会い

ちょうど秋になり始めていた日だった。

木の葉がだんだんと赤色に変わっていき夏の終わりを感じさせるあの夜の事。

私、にしかわあゆ西川愛結は中学校2年生。

親を早くに亡くしており今は祖母の家に住んでいた。

この日は部活があり、帰りが遅くなっていた。

「あつ。落ち葉」

愛結は足元に落ちた落ち葉をそっと拾い上げる。

落ち葉は赤い色をしていた。

「きれい」

ぼそつと言つぶやくと家の方に歩いて行った。

ドンッ

突然誰かにぶつかった。

「ごめんなさい。大丈夫？」

それは愛結と同じくらいの年ごろで顔立ちが良く爽やか系な男の子だった。

「大丈夫だけど…」

少し足が痛かったが無理に笑って答えた。

「今、足が痛いつて思った？」

爽やか系男子が微笑みながら聞いてくる。

その笑顔に愛結は少し赤面する。

「ちよつとね」

素直に答えた。

すると爽やか系男子はちよつと悲しい顔をして、

「ごめんね。あつ」

爽やか系男子が後ろを向くと3人の男の人が立っていた。

「走れる？つてかごめん、走って」

されるがままに愛結は走った。

不思議なことに足は全くつて言ってもいいほど痛くなかった。

どれくらい走っただろうか。

後ろにいた男たちは消えて見覚えのないところにいた。

「ごめんね。後で送ってくから」

心配そうな顔を見てか爽やか系男子が答えた。

「うっん。いいよ。あのさ…」

「何？」

笑顔で返される。

この笑顔を見ると顔が火照る。

「さっきの…何？」

聞いてはいけないものを聞くようにして愛結は聞く。

「あゝあれね」

爽やか系男子は笑いながら答える。

「あれは、借金取り。なんかしんねえけど追っかけてくるんだ」

借金取り…？この爽やか系男子が…？？？愛結は心の中で叫んだ。

「あ、俺坂本竜也。秋風中学校2年よろしく」

「え？私も秋風中学校の2年生…！」

偶然の出会いに驚きを隠せない私。

「知ってたよ。前から可愛いなあって思ってた」

カァァァ

顔が真っ赤になったと思う。

竜也はかなり背が高く運動神経がよさそうだ。

今の時代で言うイケメンと言われる人にお世辞でも可愛いと言われてしまっただろうしもうもなくなるに違いない。

「本当に俺の事知らない？喋ったことあんだけど？まあ無理もない

か」

「嘘！ごめんなさい」

愛結は一生懸命に謝った。

「許さねえ」

「そんなあ」

簡単に言われちゃめんどくさがりの愛結は諦めてしまう。

「じゃあいいや。私の家どっち？」

「よくないよ」

「えっ？」

予想外の展開に愛結はただボケていた。

風がサツと吹く。

出会い（後書き）

初めて書く小説？です。

なにかアドバイスなどがあれば大歓迎です！！

温かい目で見てくださいッ！

友ずれ

「許さねえ」

頭の中で何度もよぎる。

覚えてないだけでなんでそこまで言われなくては…

愛結は不思議でたまらなかった。

今、竜也は道路の端で休憩をしていた。

愛結も最初は隣にいたが居にくくてうろつろと歩いていた。

「あつ」

愛結が急に何かを思い出したかのように言う。

「どうしたの？」

竜也は心配そうに愛結を見る。

愛結は手元を見た。

「無い。無いの。手に持ってたはずの落ち葉が」

愛結は急いで周りを見渡す。

竜也はなんだそんなことかと来た道をゆっくりと歩いて行った。

「ねえ竜也くん落ち葉知らない？」

愛結は探すのに疲れ竜也に助けを求めた。

竜也はさっきの告白？を無視され少し苛立っていた。

「お前の家どこだよ？送ってくからよ」

少しきつく言い過ぎたかもしれない。

そう思った。

「ここから東の方かな？送ってくれるの？」

「ああ。もとは俺が悪いんだし…」

愛結は竜也君って優しいんだと思った。

けど、落ち葉を探したい。

あの落ち葉はすごくきれいだった。

あれをおばあちゃんに見せてあげたい。

おばあちゃんはきつと喜んでくれると思うから。

「わかった。落ち葉だろ？一緒に探してやるよ」

竜也は愛結が落ち葉の事を根に持っているのがわかった。

（やっぱり俺、こいつの事が…）

「ありがとう」

好き。

そう思う前にありがとうって言われた。

竜也はあまり普段ありがとうなんて言われないからどきっとした。

「お、おう」

ぎこちない返事をした。

二人は秋の冷たい風が吹く中、来た道を早歩きで帰った。

途中で落ち葉を探しながら。

赤い落ち葉はいっぱいあった。

けど、さっきのようなきれいな赤色ではなかった。

「もういいや」

愛結は諦めた。

愛結の癖だった。

「よくないよ」

竜也はまだ諦めていなかった。

「どうせ落ち葉だしいいよ」

「よくないって。おばあちゃんに見せたかったんだろ？」

「そうだけど…」

「でももういい」

愛結は吹っ切れたように言う。

「ダメだよ」

竜也が甘い声を出す。

愛結は竜也を見ると、

チュ

竜也は愛結にキスをした。

「ちょ、ちよつと」

愛結は突然のことではびっくりした。

「あ、ごめん」

（くそ。可愛すぎてしまった）

「お相子でいいかな？」

「え？」

「私竜也君の事覚えてなかったからそれのお相子でもいい？」

「いいの？」

正直わからなかった。

急に初キスを奪われて平気でお相子なんて言うなんて。

「いいよ。竜也君が許してくれるなら」

愛結もさっきの「許さない」が残っていた。

正直初が今日見たばかりの男の子に奪われるのは悔しいけど、でも竜也は優しいし可愛いとまで言ってもらった。

愛結はそれだけで十分だった。

「あつ。あれ」

急に竜也が指さした。

その方向を向くときれいな落ち葉が落ちていた。

「あれだ」

愛結は落ち葉のもとへ行った。

後ろからは車が来ていた。

そんなことも知らずに…

竜也は気づいた。

竜也は急いで愛結のところへ行きかばおうとした。
間に合わなかった。

ドンッ

さっきぶつかったときよりもにぶい音がした。

二人同時に引かれてしまった。

ピーポーピーポー

かすかに救急車の音が聞こえた。
そのまま愛結は気を失った。

友ずれ（後書き）

感想待ってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1645q/>

秋風の吹くころに

2011年1月18日22時16分発行